

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、9月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（9月）

令和3年8月31日
愛媛県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報（令和3年8月26日発表）の解説

向こう1か月の天候の見通し 四国地方（8月28日～9月27日）

< 1か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1か月）	降水量（1か月）	日照時間（1か月）
四国地方	低 30 並 40 高 30% ほぼ平年並の見込み	少 30 並 30 多 40% ほぼ平年並の見込み	少 40 並 30 多 30% ほぼ平年並の見込み

< 予報のポイント >

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間、ほぼ平年並でしょう。

2 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（穂いもち）

（令和3年8月5日付け 病害虫発生予察注意報（第2号）参照）

（令和3年8月31日付け 病害虫防除技術情報（第9号）参照）

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、普通期栽培の葉いもちの発生はやや多であり、罹病性品種や中山間部では葉いもちの発生程度が高い圃場が見られている。

(イ) BLASTAMによる葉いもち感染好適条件出現の判定では、8月12～23日にかけて、感染好適日が出現している（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。

(ウ) 気象予報では、気温、降水量、日照時間ともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉いもちの発生が上位3葉までに認められる圃場では、出穂期防除は必ず行う。さらに、出穂後に天候不順が続く場合には、出穂10～15日後の仕上げ防除時にいもち病に効果のある薬剤を追加する。

(2) 紋枯病

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、発生は並であるが、天候不順が続いたことから上位進展している圃場も見られる。

(イ) 普通期栽培の茎数は、やや多い。

(ウ) 気象予報では、気温、降水量ともほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 出穂後は株内湿度が高まりやすいので発病状況を観察し、上位進展が見られる場合は早めに追加防除を実施する。

(イ) 止葉から下位の3葉の葉鞘に病斑が現れる場合、収量に影響する。

(ウ) 薬剤防除は、株元まで薬剤が到達するよう丁寧に行う。

(3) トビイロウンカ

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の定点調査では、発生を確認していない。

(イ) 8月の広域調査では、3圃場で長翅成虫及び幼虫の発生を確認している。

(ウ) 県下6か所に設置している予察灯の誘殺は、中予地区の予察灯で8/11、8/17、8/25に各1頭の誘殺を確認している。

(エ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 出穂期防除は必ず実施する。

(イ) 本虫は、株元に寄生し、特に高温年には短期間に密度が高まり収穫前に坪枯れを引き起こすことがある。下葉の枯死や田面の色調の変化などに注意する。

(ウ) 要防除密度は、8月中旬から下旬にかけて1株当たり成幼虫数が3～5頭である。この密度に達した圃場では9月中旬以降に坪枯れの恐れがあるので、定期防除は必ず実施し、その後の発生動向に注意を払う。

(4) 斑点米カメムシ類

(令和3年7月30日付け 病害虫発生予察注意報第1号参照)

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、本田の掬取り虫数は並、発生圃場率も並である。

(イ) 畦畔雑草の掬取りによる虫数はやや少～並である。なお、斑点米カメムシ類の発生種では、本田ではクモヘリカメムシ、畦畔雑草ではホソハリカメムシ、アカスジカスミカメである。

(ウ) 予察灯での誘殺数では、ミナミアオカメムシの発生は1地点でやや多であるが、その他の地点では並～やや少である(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(エ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 要防除水準は、本田乳熟期の捕虫網による20回掬取り虫数で大型種は1頭、小型種は3頭である。

(イ) 水稻の依存性が高いミナミアオカメムシ、クモヘリカメムシは本田内で繁殖するため、出穂以降も圃場内の観察を行い発生が確認されれば早急に防除を実施する。

(ウ) 防除は地域の防除指針に基づき、乳熟期～糊熟期(出穂期から10～15日)を目安に実施する。その後も多発する場合は、薬剤の収穫前日数を遵守しながら、7～10日後に追加防除を行う。

大豆

(1) ハスモンヨトウ……野菜の項参照

(2) 吸実性カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) ミナミアオカメムシの予察灯への誘殺数は1地点でやや多であるが、その他の地点では並～やや少である(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。

(イ) 気象予報では、気温はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 吸汁加害によって着莢が阻害されるため、防除は開花終期～子実肥大期に2回程度実施する。

(イ) ミナミアオカメムシは着莢以降も圃場をよく観察し、発生が確認されれば防除する。本虫は8月以降に発育段階の異なる世代が混発し、発生量が多くなるので注意する。

かんきつ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、葉の発生は並、果実の発生はやや少～少である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量ともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病果や発病枝葉は早期に除去し、園内の病原菌密度の低下を図る。

(イ) 強風により付傷すると発病が助長されるため、台風襲来前後の薬剤散布や防風対策を講じる。

(ウ) ミカンハモグリガの食害痕は、病原細菌の侵入箇所となるため夏秋梢の除去、防除を徹底する。

(2) 黒点病

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、降水量はほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 枯死枝は早期に除去し、園外で処分する。

(イ) マンゼブ剤およびマンネブ剤の散布間隔は、累積降水量が200～250mm（または散布後30日）に達した時である。ただし、本病に対して罹病性が高い‘せとか’、‘河内晩柑’、‘清見’等の散布間隔は、累積降水量約180mm（または散布後25日）とする。

(ウ) 年内収穫する品種では、収穫時期を考慮し薬剤を選択する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、寄生葉率はやや少、寄生密度は並である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内の早期多発樹で、1葉当たりの雌成虫が平均2～3頭に達した時期が防除の目安となる。

(イ) 秋季は果実や葉裏への寄生が増加するので、薬剤はかけむらのないように丁寧に散布する。

(4) ミカンサビダニ

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、発生はやや少である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 被害果はその後の発生源となるため、早期に除去・処分する。

(イ) 被害は局所的に発生しやすいので、園地をよく観察し、発生を確認したら早急に防除する。

(ウ) 高温乾燥条件が続く場合には、10月頃まで加害が継続するので注意する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、果実の発生はやや多である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 園内をこまめに観察し、発病枝及び発病果実は早期に除去し園外へ持ち出す。

(イ) 果実の感受性が高まる時期となるため、常発地では定期防除に努め、天候不順が続けば追加防除を行う。

(2) うどんこ病

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 8月中旬の調査では、発生は多である。

(イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 気温の低下とともに葉裏に白色粉状の菌叢を生じてくるため、防除に当たっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

果樹共通（かんきつ、かき、なし、キウイフルーツ）

(1) 果樹カメムシ類

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 予察灯における誘殺量は、8月以降、並～多であり、地点によりバラツキがある(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (イ) 集合フェロモントラップによる誘殺量は、少である(病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
- (ウ) 県内12地点(8月中旬調査)のヒノキ球果の結実量はやや多であるが、ヒノキ樹での振るい落とし虫数は並～やや多である(下表参照)。
- (エ) 各調査地点から採集した球果の口針鞘数は、平均5.8と平年並であるが、ヒノキ球果からの離脱の目安とされる25個/球果を超える調査地点は認められていない(下表参照)。
- (オ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) ヒノキ球果量の多い地域では、今後の飛来が多くなると予想されるので注意する。
- (イ) 飛来は地域、園地により偏ることがあるため、園内を見回り飛来初期に防除を行う。
- (ウ) 台風等の通過後、一時的に果樹園へ飛来する可能性があるため注意する。
- (エ) 収穫期が間近となる果樹では薬剤の選択に注意する。

表 ヒノキ球果調査結果(2021年8月調査)

調査地	結実量	10回すくい取り虫数						合計	口針鞘数/ ヒノキ1球果
		チャバネアオ		ツヤアオ		クサギ			
		成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫		
新居浜市船木	多	1	0	0	0	0	0	1	4.2
西条市丹原町田滝	やや多	0	0	0	0	0	0	0	8.0
今治市大西町脇	やや多	0	1	0	0	0	0	1	5.5
松山市立岩	やや多	1	0	0	0	0	0	1	1.5
松山市菅沢	中	8	0	0	0	5	0	13	11.4
松山市久谷	中	0	1	0	0	0	0	1	8.5
久万高原町明神	やや少	0	8	0	0	0	0	8	1.8
内子町五十崎	やや多	0	0	0	0	0	0	0	13.1
西予市城川町土居	やや多	2	0	0	0	0	0	2	0.9
西予市宇和町西山田	やや多	0	0	1	0	0	0	1	2.6
愛南町城辺緑	やや多	0	0	0	0	0	0	0	6.3
虫数平均(R3)		1.1	0.9	0	0	0.5	0	2.5	5.8
平年値(H23~R2)		0.0	0.6	0.1	0	0.1	0.0	2.2	7.2
今年の順位(H23~R2)		5	4	3	6	1	7	3	6

野菜

(1) 黄化えそ病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: 並～やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の調査では、発生は並である。
- (イ) 8月中旬の調査では、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生はやや多である。
- (ウ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病株は直ちに抜き取り、適正に処分する。
- (イ) 発生圃場の栽培を終了する場合は、きゅうりの株元を切断して枯死させ、保毒虫が長期間残存しないようにする(施設栽培圃場が近隣にある場合は、株元切断前にミナミキイロアザミウマに有効な薬剤を散布し保毒虫の拡散防止に努めるなど地域ぐるみで対策を講じる)。
- (ウ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が悪いため、発生圃場では5～7日間隔で2～3回防除する。
- (エ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

(2) 炭疽病(夏秋きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 8月中旬の調査では、発生はやや少である。

- (イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
- (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで丁寧に散布する。
- (3) 褐斑病（夏秋きゅうり）
- ア 予報の内容 発生量：やや少
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の調査では、発生はやや少である。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 草勢低下、窒素質肥料の過多は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
- (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで丁寧に散布する。
- (4) ベと病（夏秋きゅうり）
- ア 予報の内容 発生量：多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の調査では、発生は多である。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 成り疲れ、肥切れは発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 老化葉や発病葉は早めに除去する。
- (ウ) 発病初期の防除に重点を置き、葉裏まで丁寧に散布する。
- (5) 炭疽病（いちご）
- ア 予報の内容 発生量：並
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の育苗床を対象に行った広域調査では、並の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 葉柄や小葉にわずかでも病斑が見られる株や萎凋株は徹底的に除去し、感染源を圃場内から持ち出し適切に処分する。
- (イ) 不要な下位葉・古葉を適切に除去し、株内の湿度を下げる。
- (ウ) 雨滴や灌水の飛沫とともに胞子が飛散するので、灌水時には水滴が跳ね上がらないよう注意を払う。夕方遅くの灌水は避ける。
- (エ) 過繁茂にならないように追肥量に注意する。
- (オ) 発病してからでは防除効果が劣るので定期的な薬剤散布に努め、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション使用する。特に、降雨後に被害が拡大するので降雨前の防除を徹底する。
- (6) アブラムシ類（さといも、夏秋野菜全般）
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠
- (ア) 8月中旬の調査では、いちご育苗床でやや多、夏秋なす・夏秋トマトで並、夏秋きゅうり・さといもでやや少である。
- (イ) 黄色粘着トラップによる有翅アブラムシの誘殺量は、各地点ともに並～少で推移している。（病害虫防除所ホームページ掲載データを参照）。
- (ウ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。
- ウ 防除上の注意
- (ア) 圃場観察により早期発見に努め、発生が見られたら早めに防除する。
- (7) ハダニ類（さといも、いちご、夏秋野菜全般）
- ア 予報の内容 発生量：並～やや多
- イ 予報の根拠

- (7) 8月中旬の調査では、夏秋なすでやや多、さといも・いちご育苗床で並の発生である。
(イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (7) 圃場観察により早期発見に努め、発生がみられたら早めに防除する。
(イ) 同一薬剤の連用を避け、系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
(ウ) 圃場周辺の除草に努める。

(8) ハスモンヨトウ (さといも、大豆、いちご育苗床)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

- (7) 8月中旬の調査では、いちご育苗床で多、さといもで並の発生である。
(イ) 性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺量は、並～やや少である (病害虫防除所ホームページ掲載データを参照)。
(ウ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (7) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。
(イ) ふ化～若齢幼虫の分散前の加害葉 (大豆では白変葉) の除去に努める。

(9) オオタバコガ (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (7) 8月中旬の調査では、夏秋トマトでタバコガ類が並の発生である。
(イ) 性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺量は、少～やや少で推移している。(病害虫防除所ホームページの調査データを参照)。
(ウ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (7) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

(10) シロイチモジヨトウ (夏秋野菜全般)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (7) 性フェロモントラップによる雄成虫の誘殺量は、並～やや少で推移している (病害虫防除所ホームページの調査データを参照)。
(イ) 気象予報では、気温、降水量はともにほぼ平年並とされており、現在の発生傾向が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (7) 圃場観察により幼虫の早期発見に努め、若齢幼虫期に防除する。

【病害虫発生予察情報・各種調査データ】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。